

明日の空が気にかかる 牛をよく見て天気を知らう

昔から「男心と秋の空」あるいは「女心と秋の空」というように、九月も半ばすぎると天気が変わりやすい日々が続く。どこかへ出かけようとするとき、天気が気になる季節だ。

そんなとき、テレビや新聞の天気予報に頼るだけでなく、天気変化が自分で予知できたらと考えた人も多いことだろう。最近の予報はよく当るようになったが公的な天気予報というのは、ある程度広い地域が対象なので必要な情報が手に入らないことが間々みうけられる。

そこで、昔から伝わる「観天望気」の法がある。観天とは、天文によって天気を判断することで、「星がチラチラ見えると風が強くなる」の類である。また望気とは、雲の動きや空の色合いなどから天気を予知するもので、「山に笠雲がかかれば雨」「朝の虹は雨、夕虹は晴れ」などをいう。

そのほか広く、風、音、光の変化から天気予知することも観天望気の種類であり、動物の動きから天気を知るのも広い意味で観天望気に含まれる。それらは「ことわざ」の形で伝えられてきた。

牛を見ても昔の人は次のようなことわざを残してきた。

○牛が丸くなって寝ていると天気が悪くなる。(広島)

○牛が大量に水を飲むと雨になる。(島根)

○牛が小屋の中になっっていると寒さ厳しく、臥ふしていれば暖か。(秋田)

○牛が足をなめると天気がよくなる。(長野)

○牛の鼻にワラがくっついていたら雨が近い。(福井)

など、全国各地でも牛にまつわる天気のことわざが生きている。

注意深い観察と長い経験から残されてきた言葉だけに、当たる確率はかなり高い。このほかにも全国各地には「牛の天気予報」が残っている。先人の知恵は大切にしたいものである。

ワンポイント知識

牛トレーサビリティ制度

二〇〇一年(平成十三年)に発生したBSE(牛海綿状脳症)を起点に、牛肉は法律によって、一頭ごとに違う個体識別番号を付けられ、子牛の段階から小売店頭に至るまでその個体識別番号を伝え、小売店頭で表示することが義務づけられています。

消費者は、小売店頭で表示された個体識別番号をパソコンなどで入力し、インターネットで検索すれば、その牛の生年月日、種別、移動履歴、加工処理場名などがすべにわかるようになります。